

5. 将来へ向けてのメッセージ

世のなかに必要なものは必ず残る

日本の製造業全般に言えることだが、燃糸加工業界でも労働力をいかに確保するか、とくに若い世代の人材をどう集めるかは死活問題となっている。砂田周一氏は折を見てハローワークなどに求人募集を出しているが、興味を持ってくれる若者は少ない。しかし、「世のなかに必要なものは必ず残るから、燃糸加工も世のなかに必要でありつづける努力が必要だし、産地としてニーズをいち早く把握して魅力的な製品をつくりつづけることが重要ですね」と砂田氏は言う。

かつて今治には、農業の傍ら副業として燃糸加工をはじめた農家が数多くおり、過剰生産から免許制となった時代もある。現在今治には、専門の燃糸加工業者は7軒しか残っていない。これはタオルの生産規模が縮小している証拠であるが、分業のもとで長く今治タオル工業の発展を支えた要因のひとつとして、こうした農業の傍ら燃糸加工を担った人たちの存在は無視できない。そして、農家が燃糸加工に従事できたのは自宅に納屋などを併設して機械を設置する広い土地があったからであり、また家内労働としておもに女性が従事し労働コストを低く抑えられたことも重要である。当時の日本人の生活環境や家族構成なども、分業体制のもとでタオル工業が発展できた重要な要素である。

7軒の燃糸加工業者のなかで比較的規模の大きい砂田燃糸では、手間とコストのかかる多品種・小ロット・短納期の生産体制にシフトしているが、従業員の数は増えていない。それは、先述のように新規に募集してもなかなかこの業界に興味を持ってくれる人がいないからである。

くわえて、タオルづくりをとり巻く環境は、必ずしも恵まれているとは言えない。たとえば、今治のタオル業界の慣行として第2・

第3土曜日と日曜日が休日であり、完全週休二日制ではない。それでも昔に比べると休みの日数は増えたが、撚糸加工業もこれに準じている。また、砂田撚糸は村田機械製のダブルツイスターを使っているが、村田機械が撚糸機の製造をやめてしまったため、機械が壊れたら自社で部品を修理しなければならない。

このように、人材確保や設備の面において撚糸加工業の先行きは不透明であるが、砂田氏は従業員に対して厚い信頼を寄せており、ポジティブに状況を捉えている。「いまが本番というかチャンスというか、よそと違うもんがようやく出せるようになった感じですね。みんながおなじことをどんどんやり出した時代は差が付かんかったけど、減りはじめて差が付くようになった気がします。そう考えると、いい時代になったと感じます。」さらに、「人手不足は深刻ですが、これからは年齢に関係なく働かないかん時代ですし、その点この仕事はいつまでも働けます。若者に人気のサービス業と違って作業着とかを気にせんでええしね。」

およそ半世紀にわたって撚糸加工業をつづける砂田撚糸は、砂田氏の指揮のもとで「常に時代のニーズを掴んでいこう」をモットーにこの先の50年を見据え、従業員と力を合わせて加工技術に磨きをかける。

6. 好きな本と好きな場所

幼い頃から歴史好き

砂田氏は幼い頃から歴史好きである。大人になっても歴史好きは変わらず、とくに個性ある武将が何人も登場する戦国時代がお気に入りだ。司馬遼太郎は砂田氏の最良の作家である。司馬遼太郎は、『国盗り物語』や『関ヶ原』、『梟の城』、『播磨灘物語』、『戦雲の夢』など戦国時代の小説をいくつも書いている。そのうち2006年に

NHKの大河ドラマになった『功名が辻』（上下巻、文芸春秋、1974年〔今治市立図書館所蔵〕）は、主人公の山内一豊が妻の千代に支えられて出世する夫婦愛の物語であり、砂田氏と妻の加文氏の関係とも重なる。加文氏は、砂田氏と結婚して以来、会社の経理全般を任されているが、工場で燃糸加工をおこなう職人でもある。砂田燃糸の発展は内助の功なくして語れない。

司馬遼太郎の作品はほとんど読破している砂田氏であるが、一番好きな作品は『坂の上の雲』（1～8巻、文芸春秋、1999年〔今治市立図書館所蔵〕）である。司馬作品のなかでもベストセラーの『坂の上の雲』は、長くつづいた封建社会から明治維新をへて資本主義社会へと大きく舵を切った時代に活躍した若者たちを描いた歴史小説である。愛媛県人の英雄物語であり、賊軍とされた伊予松山藩、そして欧米諸国に後塵を拝した日本が重なり合うかのような、起死回生の物語でもある。

そのほかにも、上杉謙信と武田信玄による「川中島の戦い」を描いた海音寺潮五郎の『天と地と』（上中下巻、朝日新聞社、1969年〔今治市立図書館所蔵〕）も砂田氏にとって印象深い歴史小説である。また、純文学からSF文学まで枠にはまらない多彩な作家である筒井康隆の小説もよく読んだ。思春期の少女が体験した摩訶不思議な世界を描いた『時をかける少女』（角川書店、1979年〔今治市立図書館所蔵〕）は筒井のマスターピースであるが、大林宣彦監督によって1983年に映画化され、若者の間で大ヒットした。そして、百田尚樹の『永遠の〇』（太田出版、2006年〔今治市立図書館所蔵〕）も砂田氏にとって感動の作品である。『永



百田尚樹『永遠の〇』太田出版、2006年（今治市立図書館所蔵）。

遠の0』は、26歳の若者が、太平洋戦争末期に零戦のパイロットとして特別攻撃隊（特攻）で亡くなった実の祖父の足跡を辿るなかで戦争を疑似体験し、みずからの生について考えるようになるという



三保松原

（駿府静岡市 HP「公益財団法人するが企画観光局 地域連携部」より引用）

骨太のストーリーであり、累計発行部数 550 万部を数えるベストセラー小説である。2013 年に東宝によって映画化され、2015 年にはテレビ東京開局 50 周年特別企画でドラマ化もされた。

本にくわえ、砂田氏の人生に欠かせないのが旅である。幼い頃から家族旅行でたくさんの知らない場所を訪れ、大人になってからも旅行好きは変わらず、いろいろなところに足を運んでいる。もっぱら自家用車での長旅であるが、そのなかでも砂田氏が「ここが一番」とおもう場所は^{みほのまつばら}三保松原である。

三保松原は、静岡県静岡市清水区の三保半島にある景勝地であり、約 5km にわたりつづいている松林のことを指している。「海岸の松原越しに富士山を望む風致の優れた場所」として 1922 年に日本で初めて名勝に指定されただけあり、日本を象徴する一幅の絵のようである。2013 年には世界文化遺産「富士山—信仰の対象と芸術の源泉」の構成資産として登録されている。

（完）

（文責・インタビュー：辻智佐子）

参考文献

出石邦保「西陣襷糸業の構造（その1）その位置づけを中心として」同志社大学商学会『同志社商学』第14巻5号、1963年、68-84頁。

今治糸友会提供資料「金銭出納帳」（1959年1月7日付）。

今治立花農業協同組合 HP

（<http://www.islands.ne.jp/tachibana/ja/gaiyo.html>）。

愛媛県生涯学習センター「今治市【社会分野】曾我部右吉（1864～1956）」『データベース「えひめの記憶」』（<https://www.i-manabi.jp/system/regionals/regionals/ecode:4/85/view/16387>）。

四国タオル工業組合編『タオル用語事典（タオル技術情報解説集）』四国タオル工業組合、1995年。

吉村久美子「曾我部右吉 四阪島煙害関連資料目録」愛媛県総合科学博物館編『愛媛県総合科学博物館研究報告』17号、2012年、63-84頁。

編集後記

2023年1月23日（月）、「10年に一度の寒波到来」の前日。今治でも冬らしい寒い曇天の日に砂田襷糸（株）本社にてインタビューをおこないました。本社はのどかな田園風景のなかにあり、通された事務所2階の部屋には昔ながらの畳とコタツ。落ち着いた空間でコタツに入って2時間ほど砂田さんからお話を伺いました。

砂田さんは寡黙ながら内に秘めたものがあり、仕事に情熱をもって向き合ってきた姿勢がひしひしと伝わってきました。多くを語らない砂田さんですが、幼少年時代は大家族のなかで大切に育てられ、砂田家の長男としての自覚を自然に身に付け、跡取りの身だけれどいちどは外から故郷を見てみたいという強い思いで上京しました。

選んだ大学は東京農業大学。言わずと知れた日本を代表する私立の農業大学であり、ダイコン踊りは同大学の代名詞にもなっているほど有名です。何かことあるごとに同窓生が集まると、砂田さんもダイコン踊りをしているそうです。そんな陽気な砂田さんもみてみたいですが、撚糸加工というタオル製造を陰から支える作業と毎日向き合っている砂田さんの経営者兼職人としての顔は、誠実さに溢れています。

撚糸加工は今治の多種多様なタオル製品に欠かせない準備工程であり、砂田さんの郷土愛は「ここ今治で撚糸加工をつづけている」ことに表れています。日本全国を見渡すと、かつて織物産地で栄えた地域の多くは生産者の廃業によって姿を消しています。そうした状況でも、今治タオルが織物産地として歴史を重ねているのは、砂田さんをはじめとする「タオルびと」がいるからです。砂田撚糸本社から見る広い田園風景と同様、改めてモノづくりを支える人びとの裾野は広いなとおもいました。

次回の「タオルびと」

「タオルびと」の37人目は、タオルの染晒加工の工程で排出される水処理を専門におこなう（有）グリーンメンテナンス代表取締役の佐伯正浩氏である。タオル製造において重要な作業工程である晒染加工は大量の水を使用するが、晒して染めたあとの排水はきれいな水に回復させ自然に戻す。世界でもトップクラスの環境基準を設置している日本の排水処理は高い技術と管理を必要とするが、その仕事を担っているのがグリーンメンテナンスである。

